

# 日本美術史講義 7 b

2021年秋学期 火曜4限

担当：伊藤 大輔

第5回

# 【注意】

このパワーポイントスライドは、本講義の**受講者専用**です。

許可無く、複製・公開すること、あるいは知り合いや友人へ転送することは**禁じます**。個人の学習のみに使用して下さい。

違反しますと、**作品の所有者、写真の撮影者、写真の出版元等の権利者**とトラブルになる可能性があります。

トラブルを避け、自分の身を守るという観点から、制限にご協力下さい。

# はじめに

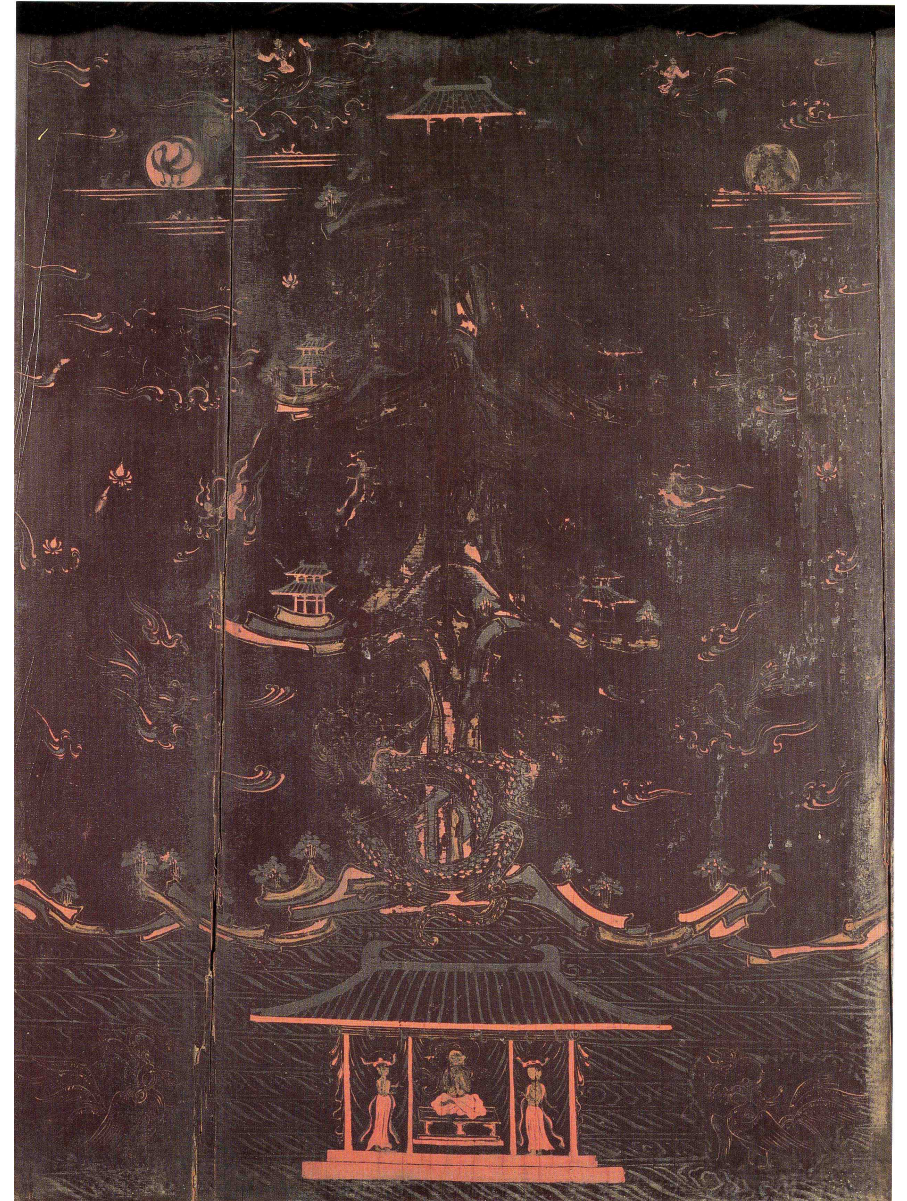
今回は、「玉虫厨子」の須弥座に描かれた絵画の残りの部分、および新しい単元として、法隆寺金堂の壁画について、学びます。

# ①玉虫厨子の絵画（続き）

## （1）須弥座 背面 須弥山図

図様は、海中から、茸状に傘を開いた須弥山が伸び、山頂に帝釈天の忉利天宮がある。

※図柄の細部は、次頁以降を確認して下さい。



# ①玉虫厨子の絵画（続き）

【図様の詳細（下から）】

1. 海中に海龍王の館



# ①玉虫厨子の絵画（続き）

2. 須弥山の麓部分  
双龍が巻き付いている

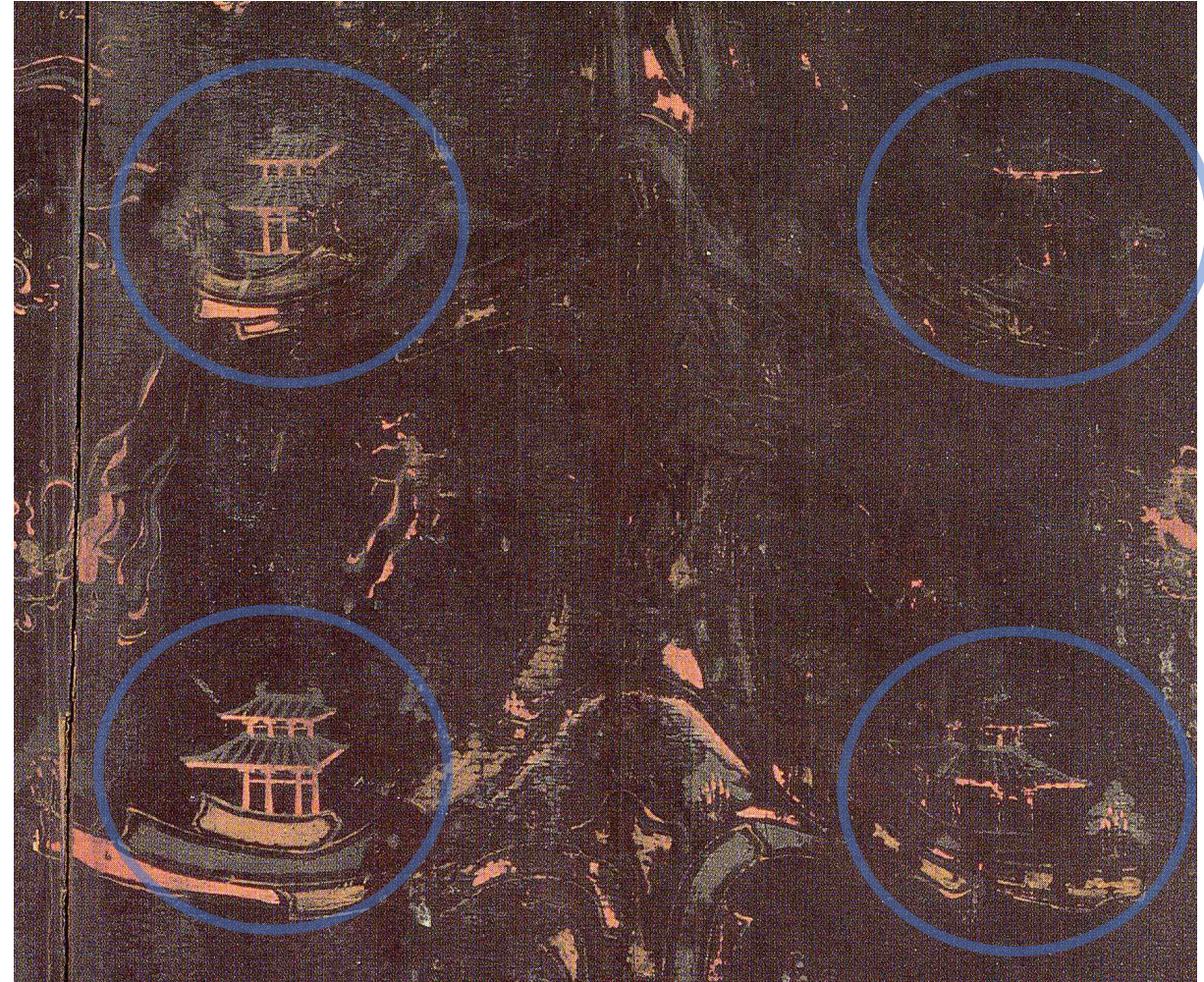


# ①玉虫厨子の絵画（続き）

## 3. 須弥山の中腹

山の主軸からC字形に岩が伸びて、楼閣が建つ。

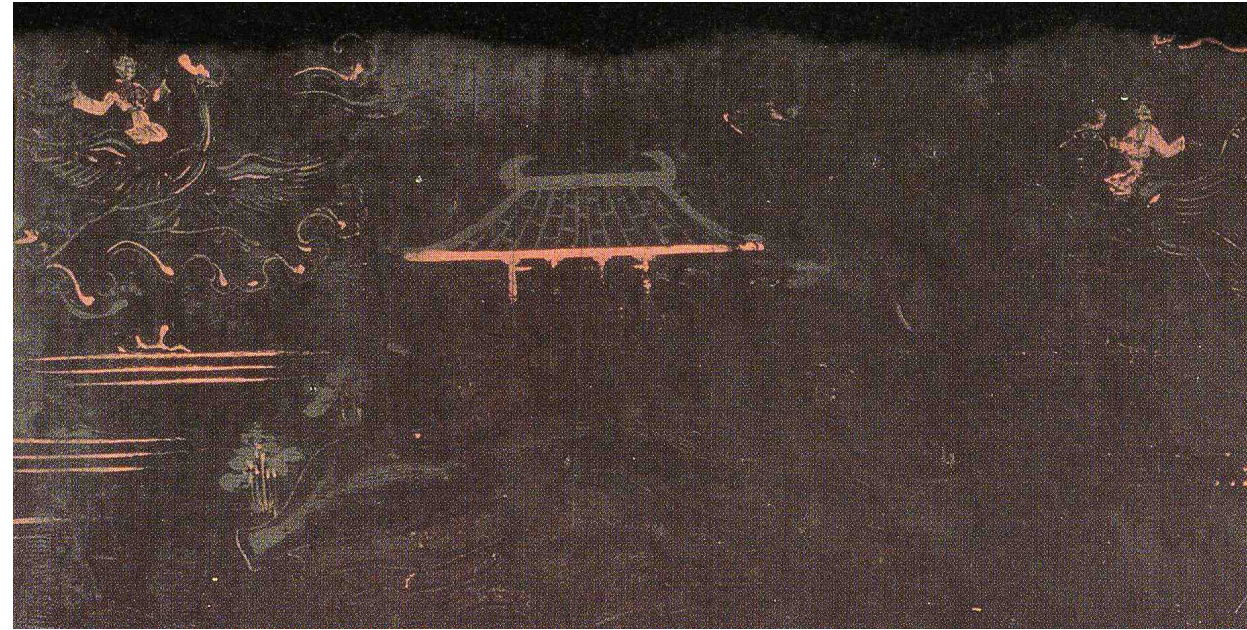
上下左右で四棟あり、須弥山中腹にあるという「**四天王宮**」と見られる。



# ①玉虫厨子の絵画（続き）

4. 須弥山の山頂は、帝釈天の住所である忉利天(とうりてん)であり、忉利天宮が見える。

宮殿の左右の虚空には、鳳凰に乗った仙人が描かれている。

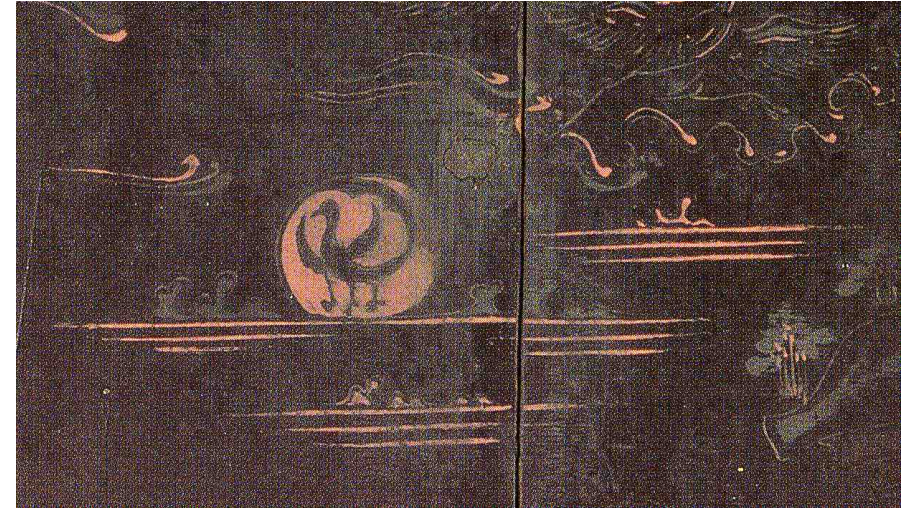


六大寺大観 法隆寺5 建築・工芸・絵画（岩波書店）奈良六大寺大観刊行会、2001



# ①玉虫厨子の絵画（続き）

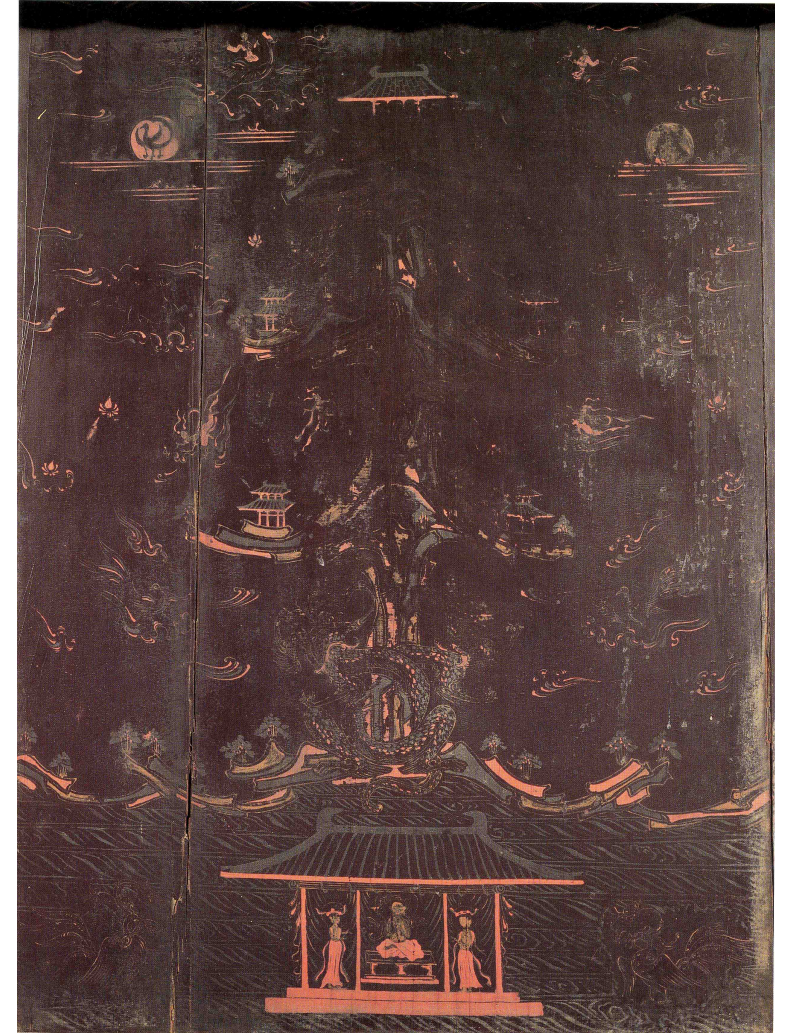
5. 仙人の斜め下には、日象  
（三本脚の鳥）と月象（蟾  
蜍＝カエル）が配置される



# ①玉虫厨子の絵画（続き）

須弥座 背面は、「須弥座」としての意義から、古代インドの世界観である須弥山図を描いていると考えられる。

そこに、海中にある海龍王の宮殿を組み合わせている。

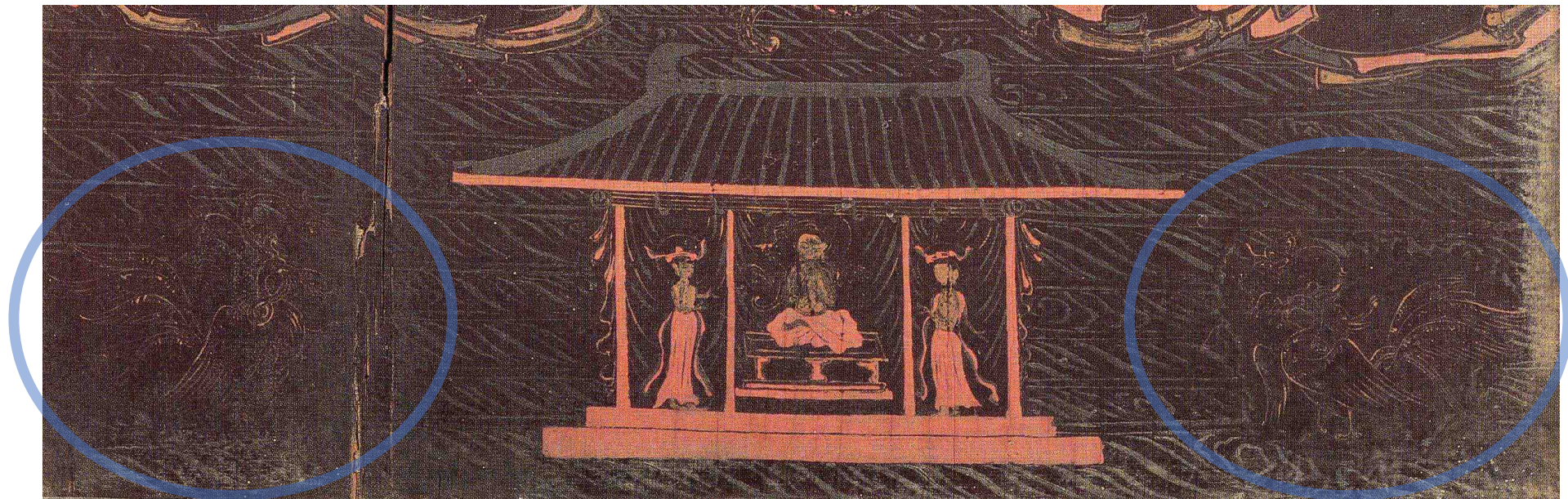


六大寺大観 法隆寺5 建築・工芸・絵画（岩波書店）  
奈良六大寺大観刊行会、2001

# ①玉虫厨子の絵画（続き）

海中の海龍王の宮殿には、如来と菩薩がおり、宮殿の左右に迦楼羅鳥が見られる。

このことから、龍王の子を食べる迦楼羅鳥に説法をして帰依させたという『海龍王経』「請仏品」の経意の表現とされる。



迦楼羅鳥

迦楼羅鳥

# ①玉虫厨子の絵画（続き）

玉虫厨子の背面は、須弥座と宮殿部を通して見ると、悟りの成就に向けて上昇してゆく階段を視覚的に表しているともされる（石田尚豊説）。

- ・ 須弥座下部の海龍王の宮殿が、発心により釈迦に帰依した段階
- ・ 須弥山は、四天王や最上層の帝釈天が住む天部の段階
- ・ 宮殿部の靈鷲山の下方は、初心の菩薩の段階
- ・ 靈鷲山の頂上には、悟りを得た如来の宝塔がある悟りの段階

という形で、修行の段階に応じて階段を上っていく形で、須弥座と宮殿部が连接的に描かれているとされる。

如来

初心の菩薩

天部

発心



【以上で、玉虫厨子の絵画に関する説明は終わりです。】

【次に、玉虫厨子の建築としての側面に簡単に触れておきます。】

# ①玉虫厨子の絵画（続き）

## （2）建築として玉虫厨子

玉虫厨子は、建築の史料としても重視されている。

現存最古の木造建築物は、法隆寺の金堂であるが、必ずしも飛鳥時代の建築様式を示すとは言えない。

その完成は690年代と推定される。



六大寺大観 法隆寺5 建築・工芸・絵画（岩波書店）  
奈良六大寺大観刊行会、2001

# ①玉虫厨子の絵画（続き）

法隆寺金堂以前の建築の事例としては、山田寺の金堂がある。

※山田寺は、天武十四年（685）完成。

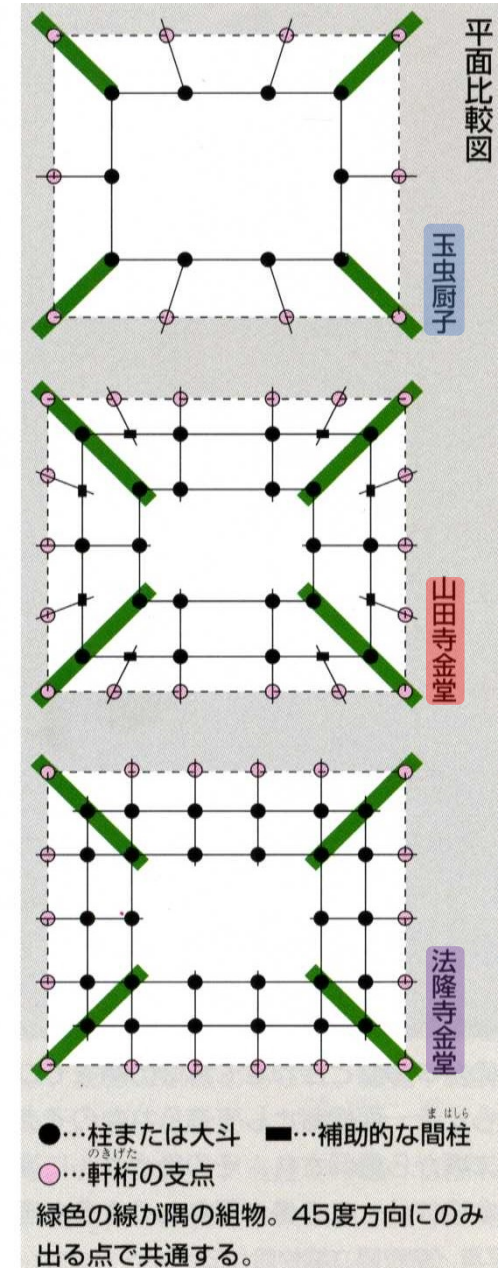
これらの実在の建築よりも古い平面を示すのが、「玉虫厨子」の宮殿である。



山田寺の遺構

# ①玉虫厨子の絵画（続き）

1. **玉虫厨子の屋根組**（右図の上）は、中央の一点から放射状に広がる形であり、突き詰めれば、円形の建物の構造を、長方形の平面に応用したものとも考えられる。
  2. **山田寺の金堂**（右図中）では、放射状に伸びる組物と水平垂直の組物が混在している。
  3. **法隆寺の金堂**（右図下）では、隅の組物を除いて、放射状の部材は消える。
- という展開を辿る。

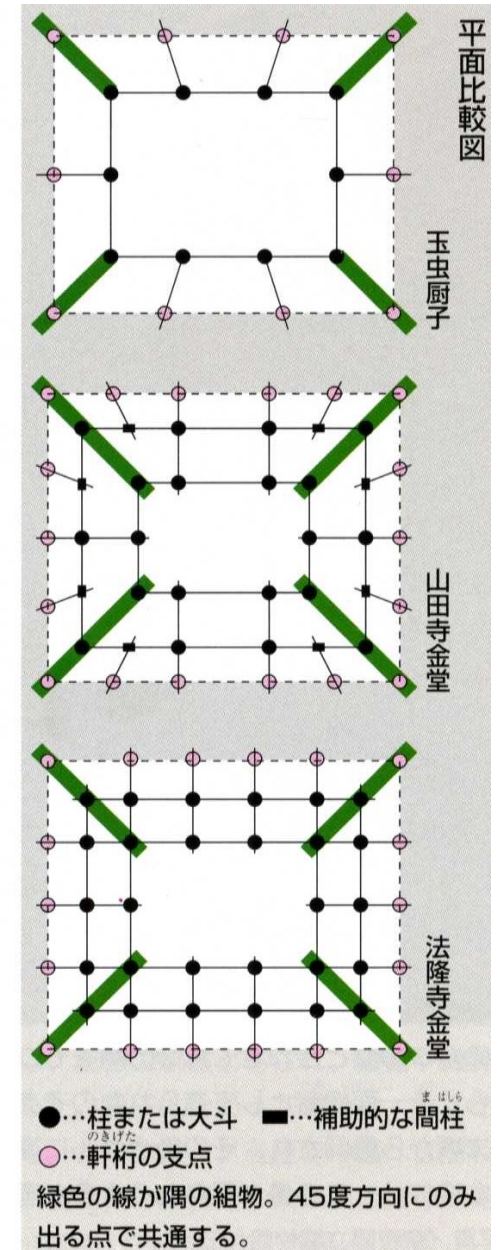




# ①玉虫厨子の絵画（続き）

上記のような展開を、逆行すると、寺院の金堂は、元々円形をベースに設計されていた可能性が浮かび上がる。

しかし、中国・朝鮮半島でもそのような円形の古い遺構は存在していないので、上記は仮説に留まる。



# ①玉虫厨子の絵画（続き）

西洋美術史の吉川逸治氏は、寺院の金堂と西洋建築の円形ドームが起源を同じくする可能性を提唱される。

吉川説では、円形こそが天空の形を写し取るのに相応しく、堂内を聖なる宇宙として表象するために、洋の東西で共通して円形の日蓋が求められた、とされる。

（吉川逸治「仏教建築における金堂形式の成立」）



図版削除

フィレンツェ  
サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂

【以上で、「玉虫厨子」の単元は終了します。】

【次に、再建後の法隆寺の絵画作品を代表する法隆寺金堂壁画について話を進めます。】

※ちなみに、「玉虫厨子」は、火災前・再建前の法隆寺を代表する絵画作品になります。

## ②法隆寺金堂壁画の基礎

### (1) 法隆寺金堂の成立

第1回講義で見たように、法隆寺金堂は、670年の火災後に再建されたものである。

再建年代は、史料から690年代初頭と考えられる。



日本美術全集2 法隆寺と奈良の寺院（小学館）長岡龍作、2012

## ②法隆寺金堂壁画の基礎

法隆寺金堂壁画は、昭和24年（1949）の火災で焼失した。

現在は、消失前の写真や模写資料によって復元的に考察されている。

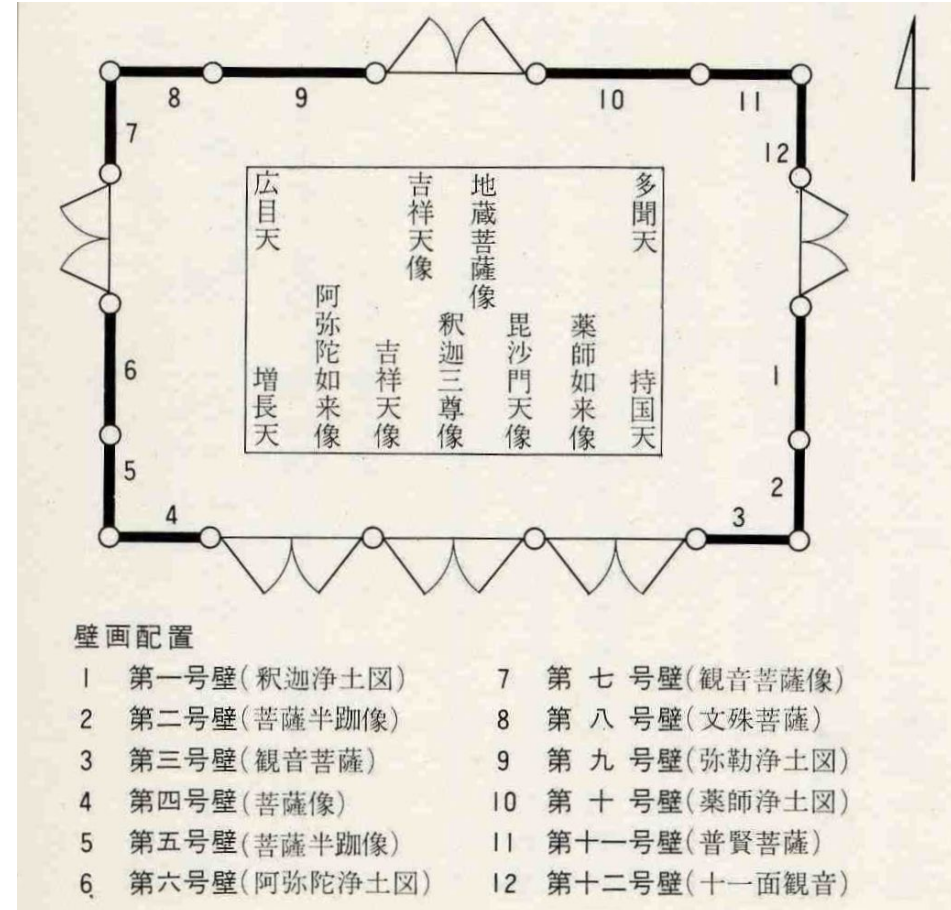


## ②法隆寺金堂壁画の基礎

### (2) 壁画の名称について

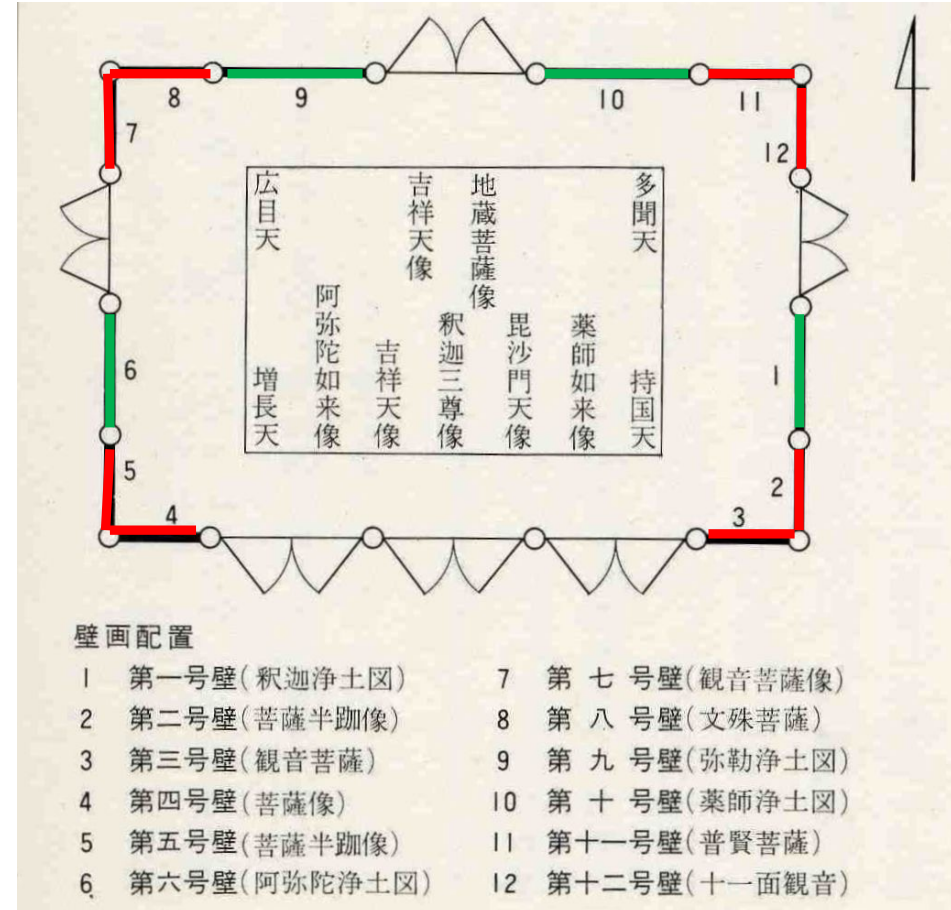
1. 壁画は、12面ある。
2. **大壁**と**小壁**の2種類がある。
3. 現在、東側の**大壁**から順に、時計回りで**1号壁～12号壁**まで番号が振られている。

※壁面の位置と名称を確認して下さい。



## ②法隆寺金堂壁画の基礎

4. 大壁が4面、小壁が8面である。
5. 小壁は四つの角をはさむように立つ（赤の部分）  
（緑が大壁）。



今回の講義はここまでです。

金堂壁画の配置を確認したところで、各画面の詳細については次回検討します。